

日本OR学会賞

2018年度学会賞のうち、業績賞・普及賞・実施賞について、表彰委員会で選考のうえ、理事会にて以下のとおり承認されました。

各賞は2019年3月14日の春季研究発表会（千葉工業大学津田沼キャンパス）にて授与されました。

第20回 業績賞

● 池上敦子 氏（成蹊大学）

[選考理由]

池上氏は20年以上にわたりスケジューリング問題、特にナース・スケジューリング問題に先駆的に取り組み、1997年日本OR学会「事例研究奨励賞」受賞に象徴される地道な調査に基づく優れた事例研究を行うのみならず、問題が内包する数学的構造にも着目しその成果がMathematical Programmingに掲載されるなど、国内外における当該分野の研究教育を、理論と実用の双方から牽引してきた。さらに同様のスタンスで鉄道最安運賃経路探索問題にも取り組み、企業と法令の要請から厳密な最適解が必要な困難な問題に高速解法を提案し、関東圏の自動改札システムで実際に使用されるなど、オペレーションズ・リサーチの普及に大きく貢献した。

さらに本学会においては編集委員、代議員を担当し、特に2013から2年間は機関誌編集委員長を務め、表紙や誌面づくりの刷新に大きく寄与した。現在も学会創立60周年記念事業の一つである「シリーズ：最適化モデリング」の編集委員として最適化モデリング研究の深化を目指し、自身も原稿を執筆している。

以上のように池上敦子氏が本学会において研究・教育・普及を通じて果たした業績はきわめて顕著であり、同氏に本学会業績賞を授与することとした。

第44回 普及賞

● 岳 五一 氏（甲南大学）

[選考理由]

岳氏は一貫して情報通信ネットワークに関する研究に従事し、関連する数多くの国際会議組織運営委員会、TPC委員会等の委員長等を歴任し貢献してきた。特に国際会議QTNAを2006年に共同創立し、以後QTNAの運営委員会共同議長としてこれまで韓国、日本、台湾、シンガポール、中国、米国、ベトナム、ニュージーランド等において同会を13回開催している。また、QTNAにおいて実行組織委員長、TPC委員長を9回務め、Springer LNCS等による論文集や論文誌特集号のEditorを多数回務め、普及活動と共に待ち行列理論とネットワーク応用に係る研究者に対し論文発表と国際学術交流の場を提供してきた。また、1995年以降今日まで13回にわたり中国各地で開催されている国際会議ISORAにおいてPC委員を続け、ISORA 2018の同委員会委員長、論文誌特集号Editorとして、日本・中国の橋渡し役となって多大な貢献を行い、両国におけるORの普及に尽力してきた。さらに、学会内では、「情報ネットワーク性能評価」研究部会主査、2011年秋季研究発表会実行委員長、関西支部副支部長、支部長、機関誌特集号編集委員長等を歴任し、学会活動にも大きく貢献してきた。2008年にフェローの称号も授与されている。以上のように国際的な研究普及の促進と共に、本学会の発展に大きく寄与する等精力的で幅広い研究・普及活動を評価した。

● 鈴木敦夫 氏 (南山大学)

[選考理由]

鈴木氏はボロノイ図の研究など施設配置問題の研究で顕著な業績をあげ、それらは数多くの研究論文で引用されている。これらの研究の傍ら、中部支部長として、数多くのシンポジウムや講演会を開催するなど、オペレーションズ・リサーチの普及に尽力してきた。また「実用的なスケジューリングシステム」構築を目的として、病院や企業におけるスケジューリング問題にも精力的に取り組み、優れた理論的成果でスケジューリング学会の学会賞（技術賞）を受賞するのみならず、共同研究先と長期間にわたって研究を継続することでも、本学会の普及に大きく貢献している。特に2000年からは南山大学で「都市のORワークショップ」を開催、さらに2012年には名古屋・京都で国際シンポジウム International Symposium on Locational Decisions も開催するなど、「都市のOR」研究分野における若手育成と日本と海外との研究交流に尽くしてきた。以上のように、自身の研究活動のみならず、企業・大学・学会を通じて継続的かつ精力的にオペレーションズ・リサーチの研究普及活動に貢献していることを評価した。

第43回 実施賞

● 公益財団法人鉄道総合技術研究所 (会長 正田英介)

[選考理由]

公益財団法人鉄道総合技術研究所は1986年の設立以来、鉄道に関する技術的・人間科学的な試験、研究開発、コンサルティングなどで、ORを多く適用してきた。中でも列車ダイヤや運転士のスケジュールの策定やそれに基づく日々の列車運行の管理に代表される運輸（輸送）の業務システムでの適用例が多く、「列車運行実績ダイヤデータ分析システム」の例では都市圏のラッシュ時に日々発生する細かい列車遅延の分析結果が得られることから、列車ダイヤ改善のための定量的材料となっている。ORの適用は業務システムの垣根を越え、施設（構造物）の業務システムにおける「鉄道線路保守計画の最適化システム」、電気の業務システムにおける「列車運行電力デマンド制御」などにもなされている。同研究所は2005年にすでに実施賞を受賞しているが、以降「鉄道線路保守計画の最適化システム」（機関誌2012年）「列車運行実績ダイヤデータ分析システム@Plan」（秋季研究発表会2014年）、「小惑星探査機『はやぶさ』の技術を応用した列車運行電力デマンド制御に関する列車走行試験」（機関誌2018年）など、本学会研究発表会での発表と機関誌の記事で25件を上回る実績がある。以上のような社会的意義の高い成果を数多く継続してあげていることを評価した。

[2018年度表彰委員]

吉瀬章子 (委員長・筑波大学), 三好直人 (副委員長・東京工業大学), 土谷 隆 (政策研究大学院大学), 塩浦昭義 (東京工業大学), 矢島安敏 (オリックス (株)), 高橋由泰 ((株)日立製作所), 猿渡康文 (筑波大学), 鈴木 勉 (筑波大学), 村松正和 (電気通信大学), 批々木規雄 (慶應義塾大学)